

福田恆存先生、韓國を訪問すること四度、内三度青瓦臺に朴正熙大統領を訪れ歡談す。その四度目となるべき訪韓は、劇團昂の日韓演劇交流のため韓國政府に招待されて京城に赴きし昭和五十四年（一九七九）十月なり。

明日は初日といふ舞臺稽古も了はらせたる翌朝、朴正熙大統領暗殺さるとの報に接せり。國葬までの間に二回の公演を許されたるは、韓國にて劇團昂のみとのことなり。この間の事情は、先生の著『孤獨の人、朴正熙』に詳し。

一人にして一國の大統領と肝膽相照らすまでの仲になりたるなど、今までの日本の文人にては皆無に近きためしならむ。京城に赴きし折、未だ軟禁中の金大中宅を訪問、本人と直接話をせしが、それが結果として、あの男はだめだねと先生より聞きし事あり。されど金大中、後に大統領となり、金融危機も脱したるは、日本に鈴木善幸などの同調者ありたるお蔭にて、福田恆存とは相容れざる勢力の動きによるものなり。昨年完結せし、「福田恆存對談・座談集」なるシリーズにては、まことに幅廣き當代人との會話のやりとりに壓倒さる。金大中との對談もあらばこそと惜しまる。外にもT・S・エリオットや英國、米國の主導者達との對話もされたることあれば、日本に偏ることなき對談相手に、稀有の現代地球人なること感得さる。

朴大統領とかかる親密なる仲になれたるは、昭和四十九年に上梓されし福田先生の著書、『日米兩國民に訴へる』を朴大統領の首席廣報秘書官金聖鎮氏偶々讀みて感服し、大統領に面會を奨めたる結果と聞く。日本のジャーナリズム擧りて獨裁者の烙印を押しせし中に、福田恆存ひとり朴大統領を高く評價せしところあるこの書、福田恆存にとりては唯一に近い政治的發言の文章にて、他の政治的發言と見られし文章も、實は知識人論に過ぎなかりしと言ふ。折角の付合あれば、一度一同にて安氣に韓國旅行せむとの話も、大統領暗殺により立ち消えとなりぬ。又この著作の英語譯を中村保男君に依頼され、譯了せるも福田先生、中村君共にあの世に旅立てば、これも立ち消えになりぬ。

さて最近の北朝鮮の一連の動き、開城工業團地の閉鎖、ロケット發射など、殊更に現朴槿惠大統領いちめと思はれなくも無し。一方の李槿惠大統領、それに對抗するかの如く、日本に千年の恨みありと發言、さらには中國語に堪能なる故か中國への傾斜を見す。父朴正熙大統領、劇團昂の公演に、觀に行きたし、無理なれば娘を代理に觀劇さすと福田先生に約束されたる由、その令嬢とは今回の朴槿惠大統領に他なるまじ。されば多少ならず父親の日本正當理解は受継ぎたるものと思ひたきが、日本語を習はざるは父とは別の感懷あればなるか。福田先生は令嬢朴槿惠さんの言葉を想ひ出すとして、「父を日夜、見ることに、その肩にどれほどの重荷を背負つて苦しんでゐるか、それを想ふとたまらなくなります。」の言葉引用す。果して娘大統領、今後の重荷にどこまで堪へ得らるか、案ぜらるゝと共に、福田恆存先生いまさばの感しきりなり。